

# パラフレーズに着目した日本語指導書開発のための一考察 —質問紙調査から見えてきた課題—

鎌田 美千子

## はじめに

外国語 / 第二言語としての日本語の学習は、中級レベル以降、「話す」「聞く（聴く）」「読む」「書く」の言語技能別に展開されることが多い。だが、実際には、「聞いた（聴いた）ことを書く」「読んだことを話す」などのように、それぞれの言語技能が複合的に内包され、例えば話しことばを書きことばにしたり、具体的な内容を抽象化して簡潔に述べたりする。その際には、伝達手段や場面、目的、受け手などにあわせてパラフレーズ（言い換え）が必要となる。

後述するように、パラフレーズは、日本語の上達に向けて欠かせない学習事項の一つであると言える。しかし、現在のところ、日本語教授法の授業や指導書において、ほとんど取り上げられていない。鎌田（2016）では、市販日本語指導書9冊を対象にパラフレーズが扱われているかを調べた結果から、パラフレーズを扱っている指導書は9冊中1冊にとどまり、その1冊においても2文を1文に言い換えるパラフレーズのみであったことが指摘されている。パラフレーズの種類にはさまざまなものがあるのに対し、全く扱われていない、あるいはごく一部しか扱われていないとすれば、日本語教授法を学ぶ学生に教授されていないであろうと思われる。

さらに、近年、大学生の日本語力の低下が指摘される中で、日本語教授法を学んでいる学生自身が問題なくパラフレーズできているのかどうかも把握しておく必要がある。場合によっては、教え方にとどまらず、パラフレーズ自体を学ぶ機会を提供することも考えなければならない。

本研究では、このような背景をふまえて、パラフレーズに着目した日本語指導書を開発し、その一環として、読み手となる大学生・日本語教師の現状を把握することを目的とした質問紙調査を

行った。この指導書で最も重視した点は、パラフレーズの表現が「ある単語を別の単語に置き換えるだけではない」ということである。以下では、質問紙調査の結果について述べるのに先立ち、まず、この点に関してⅠ及びⅡにおいて概説する。Ⅰでは、四つの言語技能とパラフレーズとの関係について述べる。Ⅱでは、パラフレーズの教授上の留意点について述べる。次に、Ⅲでは、パラフレーズに着目した日本語指導書の試案について述べる。続くⅣで質問紙調査の方法と結果を示し、Ⅴで調査から見えてきた課題を考察する。最後に、まとめと今後の方向性について述べる。

## Ⅰ 四技能とパラフレーズとの関係

図1に示すように、四技能とパラフレーズとの関係は、大きく二つに分けられる（鎌田2012）。

第一に、「聞いた（聴いた）ことを書く」「読んだことを話す」「話した（話す）ことを書く」「書いたことを話す」といった場合である（図1の実線矢印）。これらの言語活動では、話しことばと書きことばの文体差が生じるため、それにあわせてパラフレーズが必要となる。留学生への日本語教育で言えば、インタビュー調査で聴いた発言内容をレポートの一部に簡潔に書く、読んだ文献の内容を口頭で報告する、授業で発表したことをレポートにまとめるなどが例として挙げられる。

第二に、「聞いた（聴いた）ことを話す」「読んだことを書く」といった場合である（図1の点線矢印）。これらの言語活動では、もとの内容を簡潔に伝える上でパラフレーズが必要となる。留学生への日本語教育で言えば、インタビュー調査で聴いた発言内容を口頭で報告する、読んだ文献の内容をレポートの一部に書くなどが例として挙げられる。

いずれの場合でもパラフレーズは伝達手段や場

面、目的、受け手などに応じてなされるため、文脈と結びつけた学習が重要であると言える。

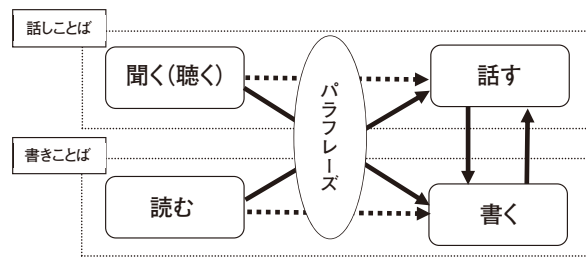


図1 四技能とパラフレーズ

## Ⅱ パラフレーズの教授上の留意点

日本語学習者にとって上述した言語活動は、話しことばと書きことばの違いを認識する場でもあり、伝達内容に見合った言語表現を学ぶ場でもある。では、教える側は、どのようなことに留意すればよいのだろうか。以下では、留学生への日本語教育を想定して特に(1)話しことばと書きことば、(2)意味内容を簡潔に表すパラフレーズ、(3)日本語レベルとの関係のそれぞれを取り上げて順に述べる<sup>1)</sup>。

### (1) 話しことばと書きことば

日本語の学習は、一般的に話しことばの習得から始まり、その後、書きことばの習得へと進んでいく。そうした中で、同じ内容を述べるのであっても、授業やゼミの発表で話す場合とレポート・論文に書く場合とでは言語表現が異なることに焦点を当てた学習が必要である。一例を挙げると、例えば大学の授業やゼミでの発表で「車を2台以上持っている家にアンケート用紙を配りました」と話したとしても、レポート・論文で述べる際には、書きことばの表現に言い換え、「車」は「自家用車」に、「持っている」は「所有している」に、「家」は「家庭」に、「配りました」は「配布した」になり、このようなレジスターに応じた教示が欠かせない(鎌田2015a)。この種のパラフレーズは、単に「車」と「自家用車」の二つの単語を知っていればできるというものではない。文脈によっては「自家用車」よりも「乗用車」「四輪自動車」のほうが適している場合もあり、また「小型車」「軽自動車」のように意味を限定して伝えたほうがよい場合もある。教える側は、この点を抑えて授業を設計するとともに、単語をペアにして機械的に覚えるだけ

の学習に陥らないようにすることが望まれる。

### (2) 意味内容を簡潔に表すパラフレーズ

ここでは、Iに前述した「読んだことを書く」と「聞いた(聴いた)ことを話す」に関連するパラフレーズについて述べる。「読んだことを書く」といった言語活動の一つには、要約がある。また、「聞いた(聴いた)ことを話す」といった言語活動の一つには、協働学習でのディスカッションがある。要約では、要点を述べる上で具体的な内容を抽象化して述べたり、含意を読み取って解釈したりする。また、協働学習においても、簡潔に言い換えて自らの発話に取り込んで話すことになる。具体的には、次の例1のように、もとの意味内容を読み取って示すようなパラフレーズがなされる。

例1 石油の価格が上がると、ガソリンはもちろん、日用品や食料品、交通運賃なども値上がりします。

→ 石油価格は、物価に影響する。

(鎌田2018: 30, 一部変更)

前述した「(1)話しことばと書きことば」の事例では主に類義語の知識が基底になっていたのに対し、例1では、事象・事柄に関する知識が関係してくる。より専門的な文章になれば、用語を含め、専門性の高い表現が必要となる(鎌田2015b, 2017)。したがって、言語面のみにとどまらず、関連する知識を確認しながら進めていくことが大切である。

### (3) 日本語レベルとの関係

話しことばから書きことばへのパラフレーズにおいても、意味内容を簡潔に表すパラフレーズにおいても、図2に示すように、言い換えた後の表現の日本語レベルが上がるのが一般的である。そのため、パラフレーズの学習は中級以降の学習として位置づけられる。

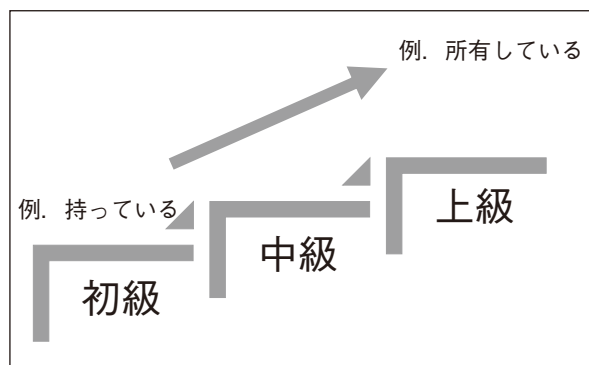


図2 日本語レベルとパラフレーズとの関係

第二言語習得研究では、中級学習者のパラフレーズの種類が限られること（藤村 1998）、上級レベルでも母語話者並みにはパラフレーズが使えないこと（鎌田 2015a）、要約では原文の理解が影響しパラフレーズの達成が難しいこと（小宮 1994）などが明らかになっている。したがって、教える側は、日本語習得上の困難点を意識しながら学習活動を組み立てることが重要である<sup>2</sup>。その際には、具体的にどのようなパラフレーズがあるのか、また種々の言語活動にパラフレーズがどのように関係しているのかといった専門的な知識が必要であると思われる。

以上をふまえて、日本語指導書の開発を試みた。次章では、その試案について述べる。

### Ⅲ パラフレーズに着目した日本語指導書の試案

#### 1. 主な対象

本指導書の主な対象は、日本語教授法の基本を既に学習している学生や日本語教師である。

#### 2. 特徴

日本語中級以降の学習として複数の言語技能を組み合わせた学習に注目し、①話すことを書く、②聞いた（聴いた）ことを書く、③読んだことを書く、④聞いた（聴いた）ことを話す、⑤読んだことを話す、⑥書いたことを話す、といった言語場面を取り上げ、教授上の留意点を示した。加えて、外国人児童生徒のための教科書リライトにも注目し、⑦相手にあわせて書くといったことも取り上げた。図3に目次（案）を示す。

目次	
第Ⅰ部	理論編
1.	パラフレーズとは
2.	パラフレーズにかかわる三要素—語彙・統語・意味—
3.	第二言語習得とパラフレーズ—話しことばと書きことば—
4.	意味を読み取って表す—解釈・引用を例に—
第Ⅱ部	実践編
1.	話すことを書く—発表の表現とスライドの表現の違いを教える—
2.	聞いた（聴いた）ことを書く—インタビュー調査で聴いた発言内容をレポートの一部に書くことを教える—
3.	読んだことを書く—文献の内容を要約することを教える—
4.	聞いた（聴いた）ことを話す—インタビュー調査で聴いた発言内容を口頭で報告することを教える—
5.	読んだことを話す—文献の内容を口頭で報告することを教える—
<コラム> 文献講読・協働学習におけるパラフレーズ	
6.	書いたことを話す—調査レポートの内容を発表することを教える—
7.	相手にあわせて書く—小・中学校教科書の文章の難易度を調整する—
<コラム> 中国語を母語とする子どもを対象としたリライトにおける漢字の扱い	
第Ⅲ部	応用編
1.	プレゼンテーションを教える際のワークシートを作る
2.	ライティングを教える際のワークシートを作る
3.	リライト教材を作る

図3 本指導書の目次（案）

#### 3. 全体の構成と内容

本指導書では、「パラフレーズとはどのようなものか」といった基本から「授業設計」「教材作成」といった応用までを段階的に編成した。具体的には、パラフレーズに関係する基礎知識を学ぶ「理論編」、授業案や教材例から授業実践を考える「実践編」、教材作成をタスク形式でシミュレーションする「応用編」の三部構成とした。以下、それぞれの概要を述べる。

「理論編」では、言語学や認知心理学の知見に触れながら、パラフレーズとはどのようなものなのか、また外国語／第二言語習得において何が課題となるのかについて解説している。各課のテーマにあわせて例文とともに学習上のポイントを提示している。

「実践編」では、「話すことを書く」「聞いた（聴いた）ことを書く」「読んだことを書く」「聞いた（聴いた）ことを話す」「読んだことを話す」「書いたことを話す」「相手にあわせて書く」といったそれぞれの言語場面を取り上げ、各パラフレーズの特徴と留意点を示している。理論編をふまえながら、発表で話す場合とスライドに示す場合の違いや、読んだ文献の日本語表現とそれを授業・ゼミで発表する際の日本語表現の違いなどに注目し、よくない例とその改善例を考えたり、授業案を検討したりする。

「応用編」では、「実践編」をふまえてワークシートやリライト教材を作成する場を設けている。鈴木（2002）を参考に、必要な手順とポイントをタスク形式で示している。最後に振り返りと改善につなげている。

このような内容の日本語指導書を開発するにあたって質問紙調査を行い、その結果をもとに開発中の指導書の改善すべき点を探り、完成に向けて示唆が得ることとした。次のⅣでは、この質問紙調査について述べる。

## Ⅳ 質問紙調査

### 1. 調査方法

質問紙調査は、2018年7月10日～7月30日に実施した。回答者は、大学で日本語教授法を学んでいる大学生3～4年生22名<sup>3</sup>（以下、「大学生群」）と日本語教師13名（以下、「日本語教師群」）の計35名である。大学生には、日本語教授法関連の授業の後に調査の趣旨を説明し、協力が得られた者に質問紙を配付した。日本語教師には個別に調査の趣旨を説明し、協力が得られた者に質問紙を配付した。回答者は、A3判4枚の質問紙に筆記具で回答した。

質問紙は、質問（Ⅰ）～（Ⅲ）と自由記述<sup>4</sup>から構成されている。質問（Ⅰ）では、レディネスとして基本的なパラフレーズができるかどうかを

確認するために問題形式で尋ねた。問題文は、文の一部を言い換える全11題から成る<sup>5</sup>。質問（Ⅱ）では、パラフレーズへの意識と学習観について「大変そう思う」「そう思う」「そう思わない」「全くそう思わない」のいずれかで回答することを求めた。質問（Ⅲ）では、まず、本指導書で使用した基本的な専門用語25語（「伝達場面」「伝達様式」「語彙」「語用論的能力」「理解語彙」「使用語彙」「発話」「プレゼンテーション」「ライティング」「リライト」「箇条書き」「見出し」「和語」「漢語」「日常語」「文章語」「指示詞」「名詞化」「上位概念」「含意」「位相」「ジャンル」「レジスター（言語使用域）」「スタイル」「言語スキル」）を提示し、そのうち知らないものに○印をつけることを求めた。次に、理論編・実践編・応用編の試案の一部の抜粋を示してそれぞれ全体的にどの程度理解したかを「100-80%程度」「79-60%程度」「59-40%程度」「39-0%程度」から一つ選択することと、意味がわからない箇所の下線を引くことを求めた。

### 2. 調査結果

#### （1）質問（Ⅰ）の結果

各問題の正答率を表1-1及び表1-2に示す。表1-1の問題は、一つの文の一部を言い換える問題であり、全体の平均正答率は85.7%であった（最高100.0%、最低63.6%）。大学生群と日本語教師群の正答率を比較したところ、大学生群85.1%、日本語教師群86.7%で大きな違いはなかった。全体として正答率が最も高かった問題は、Ⅰ-⑥とⅠ-⑧で正答率は100.0%であった。Ⅰ-⑥は、「留学経験があるかないかによって異文化理解の意識が異なる」といった文の下線部を「有無」と言い換える問題である。Ⅰ-⑧は、「1950年代の机や本棚、椅子、ベッドなどのデザインに関する資料を収集した」といった文の下線部を「家具」と言い換える問題である。一方、全体として正答率が最も低かった問題はⅠ-⑤で、正答率は51.4%であった。Ⅰ-⑤は、「災害時には、情報を正確に伝えることが重要である」といった文を言い換える際に下線部の副詞「正確に」を形容詞「正確な」にする問題である。誤答には、「正確な伝達」とせず「伝達」とのみ回答したものや、意味を取り違えたもの（例、「共有」）が見られた。



表 1-2 の問題は、ゼミでの発表場面での表現と

レポートでの表現の違いをふまえて言い換える問題である。表 1-1 の問題とは異なり、まとまった内容を言い換えなければならない。回答者全体の平均正答率は 71.4% で、例えば「車間距離を十分にとり、一定の速度を保つこと」「車間距離を十分にとり、一定のスピードで運転すること」「十分な車間距離をとる、安定したスピードで運転すること」など多様な回答があった。正答率は、大学生群 81.8%、日本語教師群 53.8% と、両者に差が見られた。無回答のほか、誤答には、助詞の誤り（例、「十分な車間距離を確保と一定速度の保持」）や意味を取り違えたもの（例、「前方の車との車間距離を十分に取り、急加速、急減速」）が見られた。

以上の結果から、基本的なパラフレーズは概ねできているものの、問題によっては正答に至らないものがあることがわかった。

問題文	正答率(%)
I - ⑪ 以下は、ゼミの発表でああなたが話した内容の一部です。二重下線部____をレポートに合う表現として簡潔に言い換えてください。 ＜発表の一部＞ 自動車の追突事故を防ぐために、 <u>前の車との間の距離を十分にとって、急に加速したり減速したりしないでスピードを変えずに運転すること、このことについては、先ほど話した通りです。</u>	71.4
一方、自動車側に目を向けると、先進技術を使って安全運転を支援するシステムの開発が行われています。このシステムが導入されている自動車は「先進安全自動車」と呼ばれています。次に、この「先進安全自動車」に搭載されているさまざまな技術について説明します。 ＜レポートの一部＞ 自動車の追突事故を防ぐために、_____については、前述した通りである。 一方、自動車側に着目すると、先進技術によって安全運転を支援するシステムの開発が行われている。このシステムが導入されている自動車は「先進安全自動車」と呼ばれている。次に、この「先進安全自動車」に搭載されているさまざまな技術について説明する。	81.8
	53.8

(正答率 上段：全体，中段：大学生群，下段：日本語教師群)

## (2) 質問 (Ⅱ) の結果

質問 (Ⅱ) の回答結果を表 2 に示す。以下では、前半のⅡ-①～Ⅱ-④でパラフレーズへの意識について尋ねた結果と、後半のⅡ-⑤～Ⅱ-⑦でパラフレーズに関する学習観について尋ねた結果とに分けて順に述べる。

### A. パラフレーズへの意識

前半のⅡ-①～Ⅱ-④の結果は、次の通りである。Ⅱ-①「パラフレーズは、自分にとって難しい」では、「大変そう思う」の回答はなかったものの、「そう思う」が 62.9% (全体) で、約 6 割の回答者が難しさを感じていた。Ⅱ-②「パラフレーズは、日本語学習者にとって難しい」では、「大変そう思う」57.1% (全体) と「そう思う」37.1% (全体) を合わせて「難しい」とする回答が 9 割を超えていた。Ⅱ-③「パラフレーズは単語の置き換えを意味する」では、「大変そう思う」の回答はなかったものの、「そう思う」が 40.0% (全体) を占めた。その内訳を見ると、大学生群 50.0%、日本語教師群 23.1% であり、大学生の二人に一人が「単語の置き換え」として捉えていた。Ⅱ-④「パラフレーズの表現は伝達的手段、目的、受け手によって決まる」では、「大変そう思う」42.9% (全体)、「そう思う」57.1% (全体) と全員が肯定的な回答をしており、正しい認識が得られていた。

以上のⅡ-①～質問Ⅱ-④の結果から、パラフレーズを難しく感じている回答者が半数を超えることがわかった。また、Ⅱ-③において、特に大学生を中心にパラフレーズを「単語の置き換え」と捉える傾向が見られた。他方、Ⅱ-④「パラフレーズの表現は伝達的手段、目的、受け手によって決まる」ことに全員が肯定的な回答をしていたことから、この点に関しては共通認識が得られていることが確認できた。

### B. パラフレーズに関する学習観

後半のⅡ-⑤～Ⅱ-⑦の結果は、次の通りである。Ⅱ-⑤「パラフレーズができるようになることは、日本語の学習において重要だ」では、「大変そう思う」45.7% (全体)、「そう思う」42.9% (全体) で、これらを合わせて約 9 割が肯定的な回答をしていた。Ⅱ-⑥「日本語の授業でパラフレーズを教えたほうがよい」では、「大変そう思う」22.9% (全体)、「そう思う」68.6% (全体) で、これらを

合わせて 9 割以上が肯定的な回答をしていた。また、Ⅱ-⑦「これから日本語教師になる人は、日本語教授法の授業でパラフレーズの教え方を学んだほうがよい」では、「大変そう思う」34.3% (全体) と「そう思う」62.9% (全体) で、これらを合わせて 9 割以上が肯定的な回答をしていた。

以上のⅡ-⑤～Ⅱ-⑦の結果から、パラフレーズの学習が概ね肯定的に捉えられていることが確認できた。

表 2 パラフレーズへの意識と学習観

(単位：%)

	大変 そう 思う	そう 思う	そう 思わ ない	全く そう 思わ ない
Ⅱ-①パラフレーズは、 自分にとって難しい	0.0	62.9	34.3	2.9
	0.0	59.1	36.4	4.5
	0.0	69.2	30.8	0.0
Ⅱ-②パラフレーズは、 日本語学習者にとっ て難しい	57.1	37.1	2.9	2.9
	50.0	40.9	4.5	4.5
	69.2	30.8	0.0	0.0
Ⅱ-③パラフレーズは、 単語の置き換えを意 味する	0.0	40.0	54.3	5.7
	0.0	50.0	45.5	4.5
	0.0	23.1	69.2	7.7
Ⅱ-④パラフレーズの 表現は、伝達的手段、 目的、受け手によっ て決まる	42.9	57.1	0.0	0.0
	54.5	45.5	0.0	0.0
	23.1	76.9	0.0	0.0
Ⅱ-⑤パラフレーズがで きるようになること は、日本語の学習に おいて重要だ	45.7	42.9	11.4	0.0
	50.0	31.8	18.2	0.0
	38.5	61.5	0.0	0.0
Ⅱ-⑥日本語の授業でパ ラフレーズを教えた ほうがよい	22.9	68.6	8.6	0.0
	27.3	59.1	13.6	0.0
	15.4	84.6	0.0	0.0
Ⅱ-⑦これから日本語教 師になる人は、日本 語教授法の授業でパ ラフレーズの教え方 を学んだほうがよい	34.3	62.9	2.9	0.0
	45.5	54.5	0.0	0.0
	15.4	76.9	7.7	0.0

(正答率 上段：全体，中段：大学生群，下段：日本語教師群)

### (3) 質問 (Ⅲ) の結果

質問 (Ⅲ) では、本指導書に使用した基本的な専門用語の中で知らないものについて、また試案の一部をどの程度理解したかを尋ねた。以下、順に述べる。

まず、本指導書に使用した基本的な専門用語の中で「知らない」と回答があった上位 5 語 (複数回答) は、(1)「位相」(68.6%、24 名)、(2)「レジスター」(60.0%、21 名)、(3)「上位概念」(51.4%、18 名)、(4)「語用論的能力」(34.3%、12 名)、(5)「リライト」(28.6%、10 名) であった。

次に、試案全体の理解度に関しては、表 3 に示す通り、理論編、実践編、応用編のいずれにおいても「100-80% 程度」とした回答が全体で約 9 割に上った。他方、試案の中で意味がわからなくて下線が引かれた箇所は、理論編では 21 か所、実践編では 7 か所、応用編では 5 か所であった。下線が引かれた箇所でも多かったのは「統語」(15 名) で、次いで「修辭的」(12 名) であった。いずれも理論編の説明部分であった。

これらの結果から、基本的な専門用語に関して「知らない」という回答があった用語、また意味がわからなくて下線が引かれた箇所に関しては説明方法を見直す必要があることが示唆された。その一方で、全体的に見れば、理解可能な水準であることが確認できた。

表 3 試案の理解度

(単位: %)

	100-80%	79-60%	59-40%	39-0%	無回答
理論編	91.4	8.6	0.0	0.0	0.0
	95.5	4.5	0.0	0.0	0.0
	84.6	15.4	0.0	0.0	0.0
実践編	97.1	0.0	0.0	0.0	2.9
	95.5	0.0	0.0	0.0	4.5
	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0
応用編	94.3	0.0	0.0	0.0	5.7
	95.5	0.0	0.0	0.0	4.5
	92.3	0.0	0.0	0.0	7.7

(正答率 上段: 全体, 中段: 大学生群, 下段: 日本語教師群)

### V 考察—調査結果から見えてきた課題—

上述した質問紙調査の結果から次のような課題が明らかになった。

第一に、基本的なパラフレーズは概ねできている反面、中には正答率が約 5 割の問題があった。誤答や無回答は、大学生群、日本語教師群を問わず見られ、パラフレーズへの意識を尋ねたⅡ-①で約 6 割が「パラフレーズは、自分にとって難しい」と回答していることを裏付ける結果となった。正答率が低かった問題は、名詞化に伴い副詞を形容詞にするものであり、この種のパラフレーズを取り上げる必要があることが示唆された。

第二に、Ⅱ-④「パラフレーズの表現は、伝達的手段、目的、受け手によって決まる」ことに関しては回答者全員に理解されていた一方で、Ⅱ-③「パラフレーズは、単語の置き換えを意味する」と捉えている回答者が全体で 4 割に上った。確かにパラフレーズの種類の一つには和語を漢語に置き換えるようなものがあるが、全体から見れば一部に過ぎず、句や節、文、複数の文といった広い範囲から言い換えるものや、異なる統語構造で言い換えるものなど、さまざまである。単語の置き換えばかりではないことの理解が図れるように指導書全般にわたって詳細に扱う必要があることが示唆された。また、ごく少数ではあったが、Ⅱ-⑤「パラフレーズができるようになることは、日本語の学習において重要だ」、Ⅱ-⑥「日本語の授業でパラフレーズを教えたほうがよい」のそれぞれで「そう思わない」とした回答が全体で 1 割程度あった。関連して自由記述には「言い換える部分が長ければ長いほど言い換え方も多様になるため、答えを絞ることができないと感じた」(大学生群) といった回答があった。仮にこれらの背景に一間一答の学習観があるならば、パラフレーズの多様な表現方法をわかりやすい事例で示すことが一層重要であると思われる。

第三に、指導書試案の難易は概ね妥当であったが、一部の専門用語と記述に関しては、よりわかりやすくする必要があることが示唆された。さらに加えるならば、指導書に提示した授業案・例文から自ら応用できるような力をつけることも検討に値する。授業案・例文を自ら考える場を設けて理解をより確実にしていくことが考えられる。

## おわりに

以上、パラフレーズに着目した日本語指導書の開発にあたって四技能とパラフレーズとの関係、教授上の留意点、指導書の試案について述べるとともに、質問紙調査の結果と、調査から見えてきた課題について述べた。質問紙調査を通して、開発中の指導書の方向性とともに、改善すべき点に関する示唆が得られた。質問紙調査という性質上、試案の一部を確認するにとどまったが、今後、試作版全体の試用による検証を行う予定である。

## 謝辞

アンケートに回答していただいた方々に深くお礼申し上げます。

## 付記

本稿は、2018年9月6日にユライ・ドブリラ大学プーラ（クロアチア共和国）で開催された International Symposium “Japanese Language Learning for New Generations” での研究発表「パラフレーズの学習に着目した日本語指導書の試案—質問紙調査から見えてきた課題—」にその後の検討を加えて論じたものである。

本研究は、JSPS 科学研究費補助金基盤研究 (C) (課題番号 16K02796) の一部として行われた。

<sup>1</sup> この他にも、複数の文で述べられた内容を短く簡潔に表すのとは逆に、抽象的な内容を相手にわかりやすく伝えるために言い換えるものなどがある。

<sup>2</sup> 第二言語としての日本語によるパラフレーズの困難点については、鎌田（2012）、鎌田（2015a）を参照してほしい。

<sup>3</sup> 大学院生 1 名を含む。

<sup>4</sup> 質問紙の最後に、全体を通して気がついた点があれば書く欄を設けた。

<sup>5</sup> 問題文 11 題は、日本語学習用テキストである鎌田・仁科（2014）の中から基本的なものを選び、使用した。

言語教育・コーパス・システム開発—』凡人社、63-76 頁。

鎌田美千子（2015a）『第二言語によるパラフレーズと日本語教育』ココ出版。

鎌田美千子（2015b）「第二言語としての日本語によるパラフレーズの諸相—ライティングにおける引用を中心に—」『第二言語としての日本語の習得研究』18 号、135-149 頁。

鎌田美千子（2016）「パラフレーズに関する指導書の開発の試み—複数の言語技能の組み合わせに注目して—」『2016 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』、225 頁。

鎌田美千子（2017）「言語教育から引用の問題を考える—パラフレーズを中心に—」東北大学高度教養教育・学生支援機構編『責任ある研究のための発表倫理を考える』東北大学出版会、107-127 頁。

鎌田美千子（2018）『大学の授業やゼミで話すためのパラフレーズ演習』鎌田美千子研究室。

鎌田美千子・仁科浩美（2014）『アカデミック・ライティングのためのパラフレーズ演習』スリーエーネットワーク。

小宮千鶴子（1994）「韓国人学習者の要約作文の問題点」佐久間まゆみ編『要約文の表現類型—日本語教育と国語教育のために—』くろしお出版、193-200 頁。

鈴木克明（2002）『教材設計マニュアル—独学を支援するために—』北大路書房。

藤村知子（1998）「要約文作成における中級日本語学習者のパラフレーズの問題点」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』24 号、1-21 頁。

## 参考文献

鎌田美千子（2012）「第二言語としての日本語によるパラフレーズの問題とその教育方法—アカデミック・ライティング教育の観点から—」仁科喜久子監修・鎌田美千子・曹紅荃・歌代崇史・村岡貴子編『日本語学習支援の構築—



# **A Study of the Development of an Instructional Book on Paraphrasing in Japanese as a Second Language: Issues Identified Through a Questionnaire Survey**

KAMADA Michiko

## **Abstract**

The purpose of this study was to develop a Japanese language instructional book focusing on paraphrasing in Japanese as a second language. This study conducted a questionnaire survey to search for improvements for the book under development and to confirm the readiness of both the university students learning Japanese language pedagogy and the Japanese language teachers. Questions were asked to confirm whether the content that used technical terms and explanations in the book was too difficult. The results of the survey showed that the book content was generally appropriate, and that the basic paraphrasing skills of the students and teachers were adequate. It also discovered the misunderstanding that “paraphrasing” only means replacing one word with another, when it can, in fact, include various other forms of description or expression. This finding suggests that it is necessary to deal with this point in more detail in the book to be developed.

(2019 年 11 月 1 日受理)